さかさまな世界

風霧　迅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さかさまな世界

【Ｎコード】

Ｎ２９５９ＢＡ

【作者名】

風霧　迅

【あらすじ】

「日本に行って勉強してこい」主人公久遠は、十に言われ、日本並盛中に通うことになる。※舞台はリボーンですが、主人公は転生者ではありません。元々リボーンの世界にいた人物です。

自己紹介

名前　若色　久遠
フリガナ　ワカイロ　クオン
性別　女
一人称　ウチ
誕生日　４月１日
髪の色　黒
目の色　黄緑
髪型　サイドテール
血液型　？
所持品　携帯　財布
身長　１６５
備考

幼い頃捨てられてしまうものの、十に拾われる。
戦闘、暗殺術を十達に習う。
十に学校に通うよう言われ日本に来た。
十が、マフィアをしていることは知っている。

名前　十　荔枝
フリガナ　モギキ　レイト
歳　２７
性別　男
一人称　オレ
誕生日　１２月２４日

髪の色　黒
目の色　赤
髪型　ロング
血液型　A
所持品　携帯　財布
身長　185
備考

久遠を育てた張本人。
アンネナーレファミリーのボス。
他に10人の部下がいる。
「凶劇（カルマ）」という二つ名がある。

名前　神埼　里桜
フリガナ　カンザキ　リオ
性別　女
一人称　私
誕生日　9月9日
髪の色　茶色
目の色　赤
髪型　ショート
血液型　O
所持品　携帯　財布
身長　153
備考

トリップ者
裕福な家庭だが、家庭内暴力があったりしたので家出をした。

お願いとして最強設定をつけられている。

始まり

「日本に？」

「そう、まあ日本の文化とか違った場所で学ぶのもいいだろう」

十（もぎき）さんの提案には正直驚く。

まあ、良いかもしれない。

日本は一度行ってみたかったところだし。

「引っ越しの手続きとかは、もうしてあるから安心しろ」

「…速いですね。やることが」

「場所は並盛だ」

…あれ？　ウチの記憶が正しければ。

「確か、ボンゴレ十代目候補もそこに住んでいたような…？」

「そうだ。別にアレを守れという指令ではない」

アレ扱いですか…でもまあよかった…。

「明日には、行くからな」

「分かりました。早速荷物のまとめをしてきます」

十さんのいた部屋を後にして自分の部屋に戻る。

並盛か…いったいどんな街だろう。

そもそもウチは恥ずかしいことなのだが、一人でロクに外に出たことは無いのである。

いつも、ファミリーの皆と一緒に近くの市場に出かけるくらいだったし、

日本という遠く離れた地に行くのは不安である。

しかも片手で数えられるほどの回数しかない。

強くなるためにひたすら修行していたことが原因である。

「ファミリーに入るのだから、強くないとだめだ」という十さんの言葉で、やることになったのである。

5歳の時に拾われてから、暗殺、戦闘術を一通り学んで自分なりの戦いを身につけたり、

今思い返すと、アレは拷問に近いと思う。

そもそも、規格外の強さを持った人たちが多いと思うこのファミリー。

体から“死ぬ気の炎”なんていう不可思議なものを使って戦ったり、

その炎に“甲兵器”というものに注入すると、動物とかが出てきたり…。

普通の人たちはそんなことはできないと願いたい。

「平和なところでありますように…」

コンコン

「ごめんね、遅くに」

「どうしたの、レイアー？」

ドアを開けたのは、銀色の髪に花の髪飾りをつけた女性。

彼女もアンネナーレファミリーの一人である。

「日本に行くのって本当？」

「うん」

「じゃあ、これ…」

渡されたのは、十字架のネックレス。

赤い宝石が埋め込まれている。

「え…いいのこれ？」

「がんばってほしいから受け取って、お守り」

「ありがとう」

こういうことをしてくれるのは彼女ぐらいである。

他の皆は、優しさの微塵もない鬼である。

戦闘にしか興味のない人たちだからなー。

「じゃあ」

「がんばるね」

さてと…荷物のまとめをしないと。

まず服は…並盛で買えばいいよね。

一応5着だけにしとこう。

それと本にアルバム…装飾品ぐらいかな。

「できた…」

これでよし。

キャリーバック一つにまとめられた。

これで眠れる。

到着

「ここが…並盛」

日本空港を出て、タクシーで並盛町に乗りついでここまで来たが

――――――

うん、平和。

言葉に表すと平凡というのだろうか。

でもそれがいい。

皆はとても楽しそうな顔をしているから。

「まあ、ファミリーの皆みたいに、非常識な人たちはいなそう」

そういえばふと疑問に思ったのだが、中学生で一人暮らしは有なのだろうか？

普通は高校生がするものってテレビで見たんだけど。

まあ大丈夫か。

さて、まだ時間もあるし観光とか、何かいいものがないか探しますか。

雑貨屋もあることだし。

キャリーバックを引きずりながら人ごみの中を歩いていった。

＊

「…でかくない？」

十さんに渡された地図を頼りに歩くと見つかり、

今度から自分の家になるマンションを見ての第一声はこれ。

（不本意だが）一人暮らしには大きすぎる３ＬＤＫのマンション。

一体どうしてこんな大きなマンションを選んだのか疑問に思う。

無駄にお金があるからなのだろうか？

紙に書かれた部屋番号を確認しながら中に入って行く。

因みに七階建ての最上階だ。

そしてドアを開けようとしたのだが、可笑しいと感じた。

人の気配がするのだ。

しかも、ウチのよく知っている気配。

……なんだろう、嫌な予感。

とりあえず、中の様子を見ないことには変わりはない。

ドアを開け、リビングに行く。

その人物は、ソファに腰かけて読書をしていたらしい。

そして、ウチに気がつくと何気ない風に声をかけた。

「やあ、久しぶり」

「……」

思わず絶句した。

なぜイタリアにいるはずの人が日本――しかもウチの家となる場所にいるのだろう。

これは幻覚、きっと悪い夢を見ているんだ。

そう思っていたらいきなりナイフが飛んできたのでとっさに避ける。

ズダダダッ

勢いよく突き刺さったナイフをみて思わず額から冷や汗が流れる。

さっそく壊す気満々！？

「恐っ！？　いきなりナイフ投げないで！」

「君が無視するからじゃないのかなぁ？」

「だからといえナイフは無い！」

もし避けなかったら、あのナイフの餌食になっていたところだろう。

そう思うとぞっとする。

というかあの気色悪い笑顔…確実に当てる気満々だった。

キモイ、変態率が確実に上がってるよ。

せっかくの美形が台無しじゃん。

「…で、どうしてここにいるのかな――――――フロド？」

現実逃避も失敗に終わったので、質問に入るとしよう。

彼の名は。フロド・ダストール。

彼もファミリーの一員なのだが、十さんと並ぶ最強の人。

強い奴と戦うことを生きがいにしている変人でもある。

ウチもその部類に入っているらしい。

二つ名も「昏睡嗜虐（ザットオブジェクト）」という恐ろしく中二病じみた名前をもっている。

「ああ、十に言われてね。『保護者の代わりとして一緒に住め』って」

「ウチの一人暮らしオワタァー！」

両手で顔を覆う。

悲しい…考えてみるとウチの人生も、もろオワタな感じがする。

そもそも、保護者選択間違ってる！

レイアーとかちょっと危険だけどウェントぐらいの人物とかマシな人いたよね！

何があった！？　皆、任務とかで忙しかったの！？

見捨てないでほしかった！

最終的にフロドを選んだとかなに考えてるの、あの人！

「これからよろしくね」

「よろしく…」

したくないけど。

「部屋は、玄関から右側奥だから」

「ハハハ！　じゃあね！」

脱兎のごとく駆けだして自分の部屋に入る。

ヤバい…ウチの精神がすごいダメージを。

あの変態め…おそろいなホント。

気を取り直して……とりあえず荷物整理でもしますか。

学校

朝、時差ボケをせずに起きた。

寝坊なんてしたら遅刻しちゃうからね。

さて…学校に行く準備しなくちゃ――――――――――――――――――――あ。

ふとあることに気付いた。

「制服…受け取りに行くの忘れてた……！」

ウチの馬鹿！

うわぁ…マジでどうしよう。

似た感じの服で行こうか。

リビングで一人唸っていると、ガチャリとドアを開ける音。

フロドが入ってきたようだ。

視線を上げ彼を見てみると…なぜか小包を片手に。

「久遠、昨日渡し忘れていた制服と生徒手帳とスクールバック」

こいつのドテッ腹に一発殴ろうかとと思った。

ウチの時間を返せ。

「……心配して損した」

問題も解決したから着替えよう。

部屋に戻り、着替え始める。

……ス、スカート短っ。

長いほうがウチ的にはよかったのに。

バックに、筆記用具とノート生徒手帳を入れて…よし。

玄関へと向かう。

おっと、忘れてた。

フロドは殺戮主義者だけど一応は家族だもん。

挨拶ぐらいはしないとね。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

＊

「下見してよかった～」

呑気に歩きながらそう呟く。

観光と共に今日から通う並盛中を昨日見てきたのだ。

物の十分で道に迷うことなく、無事に学校にたどり着いた。

まずは職員室だよね。

にしても、名前に『並』が入ってるだけあって、普通な学校だ…。

「あった。失礼しまーす」

ガラッと扉を開けて職員室に入る。

「今日から転校してきた若色久遠です」

軽い自己紹介すると、一人の教師がうちの方に近づいてくる。

「早かったな。お前のクラスの担任だ」

「どうも」

「君のクラスは1-Aだ。

もうすぐHRの時間だからついてきなさい」

「はい」

「じゃあ、呼んだら入ってこいよ」

「分かりました」

数秒すると男子が騒ぎ出した。

何があった男子。

「入ってこい」

ガラッと扉を開けて教卓の前まで行く。

「じゃ、自己紹介をしろ」

「若色久遠といいます。家の事情でイタリアから並盛に来ました。

よろしくお願いいたします」

ん？　殺気が…。

さっきのもとを見てみるとそこには悪童獄寺が。

何で殺気を向けられているんだろう？

それに…なんでボンゴレ十代目候補もいる？

なんか平和な日常をぶち壊される予感が。

「じゃあ、若色の席はあそこだ。窓側の席」

危ない。

別世界にトリップするところだった。

窓際か…まあまあいい席。

「じゃあ、ＨＲルームを終わるぞ」

すると同時にポケットに入れていた携帯が震えた。
新着メール一件？　相手は――――十さん？
何々…
『ボンゴレ十代目がどんな人物なのか。
どんな小さなことでもいいから情報をメールで送ってくれ』
十さんの指令が。
断る理由がないから『おk』で送信っと。
＊
時間はたちお昼の時間。
ウチは屋上に来ていた。
え？　理由？
お昼の時間になったときにボンゴレ十代目が教室から出ると悪童もそれを追うように、

教室から出たんだよ。

気になったもんでウチもそのあとを追ってみると、あの二人がバトルをするという話が聞こえてきて、

それを見たいから、見晴らしのいい場所――――つまりは屋上からよく見えるという判断で、

ここにいるというわけ。

「でも、部外者がいるんだよねー」

短髪の女子。

そういえばあの女子もウチに向けて殺気を放っていたね。

何でかは知らないけど。

「…リボーンもいるし」

二頭身ぐらいで黒帽子をかぶった赤ん坊――リボーン。

情報によれば十代目の家庭教師をしているんだっけ？

『死ぬ気で消火活動！！！』

死ぬ気弾を十代目に撃ったねリボーン。

額からオレンジ色の死ぬ気の炎が燃え上がっている。

属性は大空か。

ボスとして当然の属性だね。

『二倍ボム！』

と悪童の投げたダイナマイトをボンゴレは素手で消していく。

さらに、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成らしい。

ダイナマイトが一つ手からこぼれおちた。

それに続くように他のダイナマイトも落ちていく。

爆発…いやボンゴレが消した！？

『消火活動』を目的として死ぬ気になったボンゴレは、

悪童の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

ふむふむ…やるな。

『御見逸れしました！！！　あなたこそボスに相応しい！！！』

おお、忠誠かな？

今のうちにメールしよう。

『ボンゴレ十代目は、大空の炎を使う。

あと、悪童スモーキンボムと戦ってボンゴレの勝ち。

悪童は十代目に忠誠を誓った模様』

送信っと。

さて、ウチはあの短髪の女子について調べないとね。

おにぎり

学校を2日間も休んで、部屋にこもりっ放しのウチ。
学校が退屈だからって不登校になったわけではない。

休んでしまった理由は一人の少女にあった。

「……なんで？」

どうして、情報が出てこない？

パソコンのキーボードを打ちながら考える。

あのときボンゴレと悪童の近くにいた短髪の少女の名、

———「神埼里桜」を打っても“エラー”。

名前と歳、性別はでるのに家族構成や学歴が不明なのだ。

そして一番の驚き———戸籍がないこと。

どのファミリーにもいないし、組織にも所属していない。

表裏どちらを調べても全く出てこないし、あった存在も消した存在もない。

まるで———元からこの世界には存在していなかったように。

なんで…彼女はいったい何者？

「…鬼百合に頼むか」

鬼百合とはファミリー一の情報操作がとても上手い人。

国家のハッキングや、ウイルスをまくのはお手の物の男性。

神埼里桜のことは彼にお願いしてみよう。

そう思い、パソコンを閉じてベッドに入り眠りについた。

＊

「う～ん、今日は家庭科実習か…」

そもそもおにぎりというシンプル過ぎる料理。

どうした、そんなにめんどくさかったのか。

なんていろいろ突っ込みたいところだけど…ここは我慢しとこう。

なに味にしよう。

無難におかかとか鮭かな？

そして――――

「今日は家庭科実習で作ったおにぎりを」

「「「「「男子にくれてやるーっ」」」」」

うーん…ウチはあげないかな？

だってお世話になってもないし。

あれ？　変なにおいすると思えば笹川さんのおにぎり…すごい毒々しい色になってるけど。

もしかしてポイズンクッキング！？

こんなことができるのは、あの毒サソリだけ。

まさかいるの、学校に？

キョロキョロとまわりを見てみる。

っげ。ドアのとこにいた。

まさかボンゴレを毒殺しようとしてる？

「食べたら死ぬんだぞ――――――――――――っ！！！！！」

「！」

「ツナ？」

気付いたか、ボンゴレ。

あ、死ぬ気弾が撃たれた。

どうでもいいけど狙撃の場所遠くない？

そして現れるは相変わらずパンツ一丁というの変態っぷり。

クラス奴らのおにぎりを掻っ攫って無差別に食べまくるボンゴレに、

周りは「変態！」だとか悲鳴上げてる。

その時だ。ボンゴレがくるりとこっちを向いて――

…目、合った。

「まだたりねー！！」

聴こえてるってのに叫びながらこっちに飛んでくる。

正直に言いましょう。キモイ。

「…うわー」

もちろん棒読みの悲鳴を上げ、不自然に見えない程度に頭を抱えてしゃがむ。

死ぬ気のボンゴレがいきなりのことに対処出来るわけもない。

見事に壁に衝突。

ずるずると落ちていくボンゴレの額からわずかに煙が見えるから、

死ぬ気タイムは終わったんだろうね。

嗚呼メンドイ。

「いってーー！！」

「ツナ！！」

「大丈夫ですか！？　十代目！」

痛がる沢田に神埼達が駆け寄っていく。

あれ？　つか皆さん、被害者は無視ですか？　まあ丁度いい。さっさと屋上に行こう。

屋上だったら誰に邪魔されなくて済むし。

「待って！」

「……何？」

屋上に行こうとすればなぜか神埼に呼び止められた。

出来るだけ嫌な顔をしないようにしてれば、声が少し低くなってしまった。

何せ正体不明の人物。

何をされるのかは分からないからだ。

「大丈夫？」

「何ともない」

淡々と返して、改めて屋上に向かった。

＊

屋上で、おにぎりを一人で食べていると、ポケットに入れていた携帯が震えた。

「っと、メール」

鬼百合さんからだ。

神埼のことについてかな？

『クーの言う『神埼里桜』の情報は全く出てこなかった。
しかも不思議なことに、なにも問題がなかったように周りは気にしていない。
まるで、元から居たみたいにな。
某の予想だが、別世界からきた異物だな。』
……別世界？
何それ。意味不明。
『…すごい壮大な話だね。
とりあえず要注意人物として観察してみるよ。
十さんにも伝えといて。
観察対象及び危険対象が増えたって』
送信っと。
さーって、がんばりますか。

体育祭

体育祭

ウチにとっては初めての行事。

え？　小学生の時やってないのって？

…通ってない。

修業（という名の拷問）に明け暮れて過ぎて通ってないだけです、はい。

そして今、団結式というものを行っているのだが――――

棒倒しの大将は、ボクシング部の部長笹川了平は、ボンゴレに任せる気らしい。

ウチにとってはどうでもいい事実だが。

笹川了平と悪童…もう呼び方獄寺でいいや。

いい加減こう呼ぶの疲れるし。

で、その二人のかいあって、ボンゴレが総大将となったのが3時間前の出来事。

今は、日も傾いて夕方。
近くのスーパーで買い物をした帰り。

バッシャァァァアン……

突然川から何か落ちたよう。
盛大な音があたりに響いた。
「ええ――――――……」
なにこの音？
川に何が？
「って、原因アレか」
ボンゴレ達が、何かやらかしたらしい。
ビッシャビシャですよボンゴレ。
「……ハア」
と、一つため息をこぼす。

…タオルあったよね？

バックから、水玉のタオル取り出して土手に向かう。

なぜタオルが入っているのかは…秘密企業である。

「ほれ」

「え！？」

ボンゴレの頭にタオルをかける。

するとこちらを見て驚くボンゴレ。

「若色…さん？」

「そうだけど？」

ボンゴレが聞いてきたのでそう返す。

まあ、普通はこうなるよね。

「テメェ…十代目に何してんだ！」

「隼人！　落ち着いて！」

ダイナマイトを出しながら、威嚇する獄寺をなだめる神埼。

何って…タオルかけただけですけど？

そんなこともわからないの？

「濡れたままでいると風邪ひくでしょ？　だからタオル。

タオルは、返さなくてもかまわないから」

「あ、ありがとう…！」

「……何なのアイツ」

かすれた声で呟く神埼。

残念、ウチには聞こえてますよー。

「じゃ、ウチ帰るね」

さっきから、神埼の視線が疎ましい。

相当邪魔なようだ、ウチは。

＊

「〜ってなことがあったり」

夕飯の時間。

フロドにボンゴレ達のことを話していた。

もちろん、神埼のことについてもね。

「へえ…ホントに変わってるね」

「うん、まあウチ等のファミリーとは少し違う意味で変わったところだけどね」

ウチ等のファミリーも、変人ぞろいだけど最強ファミリーだしね。

「で、明日は体育祭だったけ？」

…絶対行く気だな。

表情が心なしか輝いて見えるし。

「そうだけど……来なくていいよ」

「えー、明日は暇だから行こうと思ってたんだけどねぇ」

「来るな来るな来るな来るな…」

「声に出てるよ。「来るな」って言われても行くからね」

「いや、だから本当に来なくていいんだってば！」

「……」

静かに微笑みながらウチを見るフロド。

その頬笑みは普通の女子の皆さんからみれば赤面ものだが…、

フロドを良く知っている人から見れば、恐怖や死の危険の塊だろう。

それを見たウチはとっさに――

「スミマセンデシタ」

床に土下座をした。

え？　プライド？

そんなものなくて良いよ。自分の命が大事だからね今は。

「最初っからそういえばいいのに～」

あの頬笑みで勝ったことは一度もない。

＊

で、体育祭当日

「じゃあ、遠くから見てればいいのかい？」
「そうしといて…」
容姿のせいで目立ったら、何かとダメという理由で、
遠くから見ることを条件でフロドは意見を妥協した。
ピーンポーンパーンポーン…。
『次は、借り物競走です。
各チームの、学年の代表、計６名は、集合してください』
あ、ウチの番じゃん。
「よろしく、若色さん」
「……（ッチ）」
神崎が参加していなければウチのテンションは下がることは無かったのに――
と心の中で舌打ちをした。
「ねえ、無視は無いんじゃないの？」

「敵意向けてくる時点で仲良くしたくないから、ウチ」

「っ！」

冷たく言い放つと神埼は顔を歪めるもののすぐにキッと睨むようにウチをみる。

…キモイ。

「位置について―、よーい…スタート！！」

パァンッ！！

銃弾の空砲が鳴り響く。

先輩方よりも早く駆け抜ける。

そして神埼と同着でカードを取った。

『銀髪の大人（イケメン）』

思い当たる人一人しかいないんですけどぉー……。

銀髪の大人＝フロド

何処にいるかな～。

注意深くキョロキョロと周りを見ながら探していると、視界の端に見覚えのある銀髪が映る。

いた。木に寄りかかって呑気にたばこ吸ってるし。

「フロドォー！」

「…どうかした？」

なんか周りの視線がすごいけど気にしない！

「借り物に『銀髪の大人』だから一緒に来てほしい」

「ああ、そういうこと」

一緒に走ってゴールを目指す。

まだ、誰もゴールしていないってことはウチが最初…？

『ゴール！　若色さん、1着です！』

無事に何事もなくゴールを果たした。

「うーん…走るのはやっぱりいいねぇ」

「サンキュー、フロド」

『棒倒しの問題についてお昼休憩をはさみ審議します。
各チームの三年生代表は本部まで来てください』

あ、お弁当食べないと。

んー、食べる場所は無難に屋上かな？

人来ないし。

「屋上って行っていいのかい？」

「まって、何時から読唇術仕えるようになってんの？」

思わず後ずさる。

恐ぇ！　マジ恐ぇ！

「秘密だよ。さ、屋上に行けば邪魔されないんだよね」

「分かったから引きずらないで！」

＊

「なんかグラウンドがすごい殺気が渦巻いてんですけど…」

「あっははは、面白いねぇ」

お弁当を食べながら、グラウンドを見る。

何であんなにも一色即発状態になってんのやら。

『お待たせしました。棒倒しの審議の結果が出ました
各代表の話し合いにより、今年の棒倒しはA組対B・C合同チームとします！』

「行かなくていいのかい？」

「ああ、棒倒しは男子だけなんだよ」

2対1って確実にB・Cチームが勝つでしょ。

「あれは、風紀委員長？」

風紀の腕章をつけ黒い学ランをはおった青年が、棒倒しの棒に乗っていた。

無理だよあれは。

何様僕様委員長様が大将なんだから確実に負けるでしょ。

棒倒しを観戦していたが———

「乱闘開始されてるし」

結局Ａ組は負け、体育祭は幕を閉じてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2959ba/

さかさまな世界

2012年1月12日19時46分発行